原著

複式学級における言語活動の展開
―理科・総合的な学習の時間を中心に―

原田　大樹*　時永　一世**

Deployment of language activities in Combined Classes

Hiroki HARADA and Issei TOKINAGA

概　要

平成20年度版学習指導要領において言語活動の充実が提示され、７年が経過した。言語活動の充実に関する研究は、理論的にも実践的にも数多くの研究が積まれている。それらの多くは、通常の30人規模の学級における言語活動を対象にしたものである。本稿では、複式学級という少人数の学習空間で、言語活動をどのように展開したのか、そして、複式学級における言語活動の展開にあたっての課題とはどのようなことなのかを明らかにすることを目的としている。また、言語活動の理論的研究や実践の多くは、国語科において行われているものであるが、本稿で取り上げる言語活動は、国語科を基盤にしたうえでの、総合的な学習の時間における実践である。

以上のように、本稿は、複式学級という少人数の学習空間において言語活動実践を取り上げ、国語以外の他教科での実践であるという点において、意義あるものである。

キーワード：言語活動、複式学級、アクティブラーニング

１　はじめに]

現行の学習指導要領において、言語活動の充実が提唱され７年が経過した。言語活動は、その文言から国語科における実践が数多くなされ、今日では他教科においても言語活動を取り入れた実践が多く行われるようになってきている。

言語活動に関する先行研究としては、国語科教育学の分野において数多くみられる。その中でも、日本国語教育学会が編集した『豊かな言語活動が拓く　国語単元学習の創造』[(1)] などは、言語活動を行うことで、その先を切り拓いていくというメッセージが受け取れる。

また、各教科にまたがるものとして、『新しい教育課程における言語活動の充実』（2010[2]）なども出されている。この中では、それぞれの教科において指導のポイントなるものが挙げられている。また、北海道教育大学は教育委員会と連携し、「複式学級における学習指導のあり方」（2012[3]）などを作成し、複式学級における学習指導の展開についての研究を進めている。

このように、理論的にも言語活動に関する先行研究は充実しており、また、実践現場においても、数多くの授業が行われていることは明らかである。

そこで本稿では、言語活動を取り入れた実践を取り上げ、言語活動が他教科においてどのように実践されたのかを検討していくことを目的とする。小学校の総合的な学習の時間において、言語活動がどのような意図のもと取り入れられ、どのような言語活動が仕組まれたのか、その結果、どのような力と結びついたのかを鹿児島県三島町立竹島小学校時永一世教諭の実践記録を基に検討していきたい。また、本稿は、離島の複式学級でどのような言語活動が展開されたのかを取り上げている点において意義あるものと考える。

２　本実践における言語活動

本実践において、言語活動がどのように位置づけられたのか。学習指導要領との関連、本研究の仮説を見ていく。

（1）学習指導要領との関連

（文科省から示された言語活動の重要性を，実践を通して実感し，具体策にせまる。）

＊福岡女学院大学
** 鹿児島県三島町立竹島小学校

言語活動の充実

各教科の指導に当たっては，児童の思考力，判断力，表現力等をはぐくむ観点から，基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに，言語に対する関心や理解を深め，言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え，児童の言語活動を充実すること。（学習指導要領　総則　第４の２）

思考力	情報・経験・既習内容等を関連づけて考える力
判断力	情報・視点・条件・方法等を選択したり関連づけたりする力
表現力	思考・判断の結果を自他が理解できるよう言語化する力

確かな学力
ア　基礎的・基本的な知識・技能
イ　思考力・判断力・表現力
ウ　主体的に学習に取り組む態度

↓

生きる力

確かな学力・豊かな人間性・健康・体力

（2）研究の仮説

学習指導要領を受けて，「教科指導の取組」の仮説を立てた。以下のようなものである。

仮説：教科指導の取り組み
「相手意識，目的意識，場面・状況意識，方法意識，評価意識」の価値を考えて言語活動の支援にあたれば，効果的な言語活動が展開され，思考力，判断力，表現力の育成につながるのではないか。

ここでは，「言語活動５つの意識」を以下のように捉える。

『相手意識』・・・・・誰に対して伝えるのか
『目的意識』・・・・・何のためにその言語活動を
『場面・状況意識』・・どのような場面，状況，条件の下で
『方法意識』・・・・・どのような方法で
『評価意識』・・・・・上記の意識を大切にしているか

以上の言語活動における意識は、国語科を中心としながら、全教科において取り組まれたものである。このような言語活動における「５つの意識」を学習者にもたせることで、言語活動が活性化され、その結果として、思考力・判断力・表現力の育成につながると考えられる。また、（1）で示したように、「５つの意識」をもたせることで、児童が思考・判断し、その思考・判断を「自他」が理解できるよう「表現」として言語化する。この言語化までの過程において、言語を用いて「思考・判断・表現」を行うことがそれらの力を高めるとともに、言語活動が活性化する。つまり、言語活動が充実・活性化することで「思考・判断・表現」の力が高まるとともに、「思考・判断・表現」の力が高まることで言語活動が充実・活性化されるという双方向に影響しあうものとして、「思考力・判断力・表現力」と「言語活動」との関係性をとらえた。

次に、５つの意識をもって学習を進めること、そして、計画している学習過程において、思考力・判断力・表現力のどの力を高めうるのかを次のように考えた。以下の示すのは、総合的な学習の時間での実践における学習過程と能力形成の関係を表にまとめたものである。

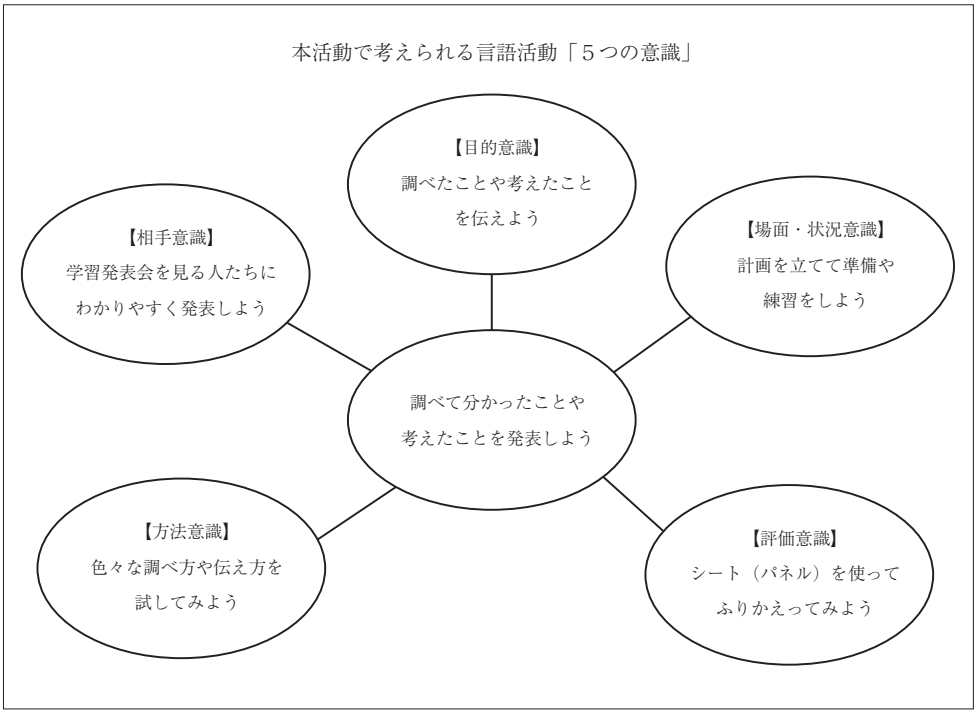
◎重点を置く　○やや重点を置く

★★★　大いに高まる、★★　高まる、★　やや高まる

	相手意識	目的意識	方法意識	場面・状況意識	評価意識	思考	判断	表現
課題設定（テーマ設定）	○	◎				★★	★	
調べる（インタビュー）		◎	○	○	○	★★	★	★
まとめる（方法決定）	○	○	◎	○		★★	★★★	
伝える（発表会準備・発表）	◎	◎	◎	◎	○	★★	★	★★★
ふりかえる		○			◎	★★	★	★

以上のように、学習過程における意識の重点の置き方、また、各学習段階において、思考力・判断力・表現力の高まりの関係性をとらえた。たとえば、課題設定の段階においては、学習者に目的意識をもたせて活動させるなかで、思考力が高まり、判断力がやや高まるというように考えた。このように見てみると、学習過程のどの段階においても思考力が高まるものと考えられている。「まとめる（方法決定）」の段階において、どのような方法で発表することが伝わりやすいかを考え、最終的に決定するという学習活動を通して判断力が身につくと考えている。さらに、調べ・まとめたものを発表練習し、実際に発表する段階で表現力が高まると考えている。

また、五つの意識を授業化する際に、学習者にわかりやすいように以下のように提示した。



このように、「５つの意識」をこの授業実践の形へと修正を加えている。子どもたちに最終的には学習発表会で発表するという意欲をもたせている。その発表を目指す点において「目的意識」が明確になる。発表会において聞き手は誰なのかを意識させることで相手意識を持たせる。また、発表につなげていくためにどのような方法で調べ、まとめていくのかを考えることで、方法意識を持たせる。このように、本実践における全体の言語活動において、学習者に「５つの意識」をもたせることは、本実践の成立そのもの及び言語活動の展開において非常に重要な役割を果たすのである。

このような発表につなげていくために、先に述べたような学習過程を組み、様々な言語活動への意識を持たせて指導しようとした。

３　理科における言語活動実践

まず、理科における言語活動実践を見ていく。以下のような重点指導項目を計画した。

★言語活動の５つの意識の中から「目的意識（何のために）」「方法意識（どんな方法で）」を特に意識して授業を展開する。
★「調べて分かったこと」や「実験結果ら分かったこと」から必要な情報だけを集約し，キーワードを見つけ，まとめる。→（思考力・判断力）
★「調べたこと」や「実験結果」をもとに，分かったことを絵にかいて表し，キーワードを用いて説明する。→（表現力）

先の述べた言語活動の「５つの意識」のうち、特に目的意識・方法意識を持たせた授業展開を考えている。また、調べる過程で情報収集や実験を行い、得られた情報の取捨選択を行いながらまとめていくことも計画している。このように、得られた情報を「キーワード」を用いることで、情報の整理・メタ言語化を行う。このような具体操作から抽象化の処理へと向かう中で、思考力・判断力・表現力を身につけることをねらいとしている。

では、時永教諭が計画した指導案を以下に示す。

（ア）単元　　チョウを育てよう

（イ）指導にあたって

a モンシロチョウが，たまご→よう虫→さなぎ→成虫の順で成長することを確認させ，成虫の絵をかかせる。

b 成虫の動きが速くて観察しにくいので，図や写真で調べさせるようにする。

c ★「からだの分かれ方」「足の数」「足がどこについているか」のキーワードで調べるようにさせ，そのキーワードを使って説明するようにさせる。

d キーワードが見つかりにくい時は，トンボの写真と比較させて気づかせるようにする。

e ★最後にかく絵には，「からだの分かれ方」「足の数」「足がどこについているか」のキーワードが，しっかり描かれているか確認させる。

（ウ）実際

（ア）単元　　電気のはたらき

（イ）指導にあたって

a 前時で「回る向きが変わる。」提示実験を行い，予想を立てやすいようにする。

b 検流計の使い方を確認させ，検流計で，電流の向きを調べることができることを理解させる。

c 前時で，回路を作る経験を積ませ，スムーズに回路を作ることができるようにさせておく。

d 回路のスイッチを入れる前に，ショート回路になっていないか確認させる。

e ★実験結果から考えたことを図で表現させる。（電流の向きを入れさせる。）

f ★「乾電池」「電流の向き」「モーター」などのキーワード使ってまとめさせ，そのキーワードを使って，説明させるようにする。

主な学習	教師の位置	主な学習
1　前時までの学習を振り返る。	3	1　学習のめあてをつかむ モーターの回る向きは，何によって変わるのだろうか。
2　学習のめあてをつかむ チョウの成虫のからだは，どのようなつくりをしているのだろうか。	4	2　自分の予想をノートに書く。 （予想される反応） 乾電池の向きを変えれば，モーターの回る向きも変わるのではないだろうか？
3　自分の予想をノートに書く。 （予想される反応） ・はねがある。・足がある。・触覚がある。	10	3　回路をつくって，電流の向きとモーターの回る向きを調べ，記録する。 4　かん電池の向きを変えて，３と同じように調べる。 5　結果をノートに書く。
4　チョウの成虫の写真を見て，気がついたことをノートに書く。 5★二人で確かめ合って，共通するところを見つける。 6★わかったことを自分の言葉でまとめ，再度チョウの成虫の絵をかく。	10	6★実験結果をもとにまとめ，わかったことを図であらわす。
・チョウの成虫のからだは，頭，むね，はらからできていて，むねにあしが６本ある。 ・このようななかまを，こん虫という。	10	・かん電池の向きを変えると，回路に流れる電流の向きが変わる。 ・モーターの回る向きは，回路に流れる電流の向きによって変わる。
7★自分のかいた絵を使って，調べてわかったことを説明する。	3	7★自分のかいた図を使って，実験結果よりわかったことを説明する。
8　適用問題を解く。	5	8　次時の予告を聞く。

以上のような指導計画を立案した。時永教諭は、３年生、４年生と交互に指導に回りながら、授業を展開しようとしている。主な言語活動は、波線で表されている。少人数でありながらも協同性を担保した授業となっている。さて、言語活動の内容であるが、それぞれの学年で時間差を作りながら言語活動を取り入れている。「話し合う」活動、そして、「自分の言葉」や「絵」で表す活動、わかったことを「説明する」活動である。「説明する」活動は、調べたこと・実験したことからわかった情報を再構成することが必要となる。この段階では、「５つの意識」のうち、相手を意識させることで、思考力・判断力・表現力が培われる。このように、得られた情報を再構成し、表現へとつながる展開が重要であると考えられる。

授業後、以下のようなまとめを行っている。

ア　音声言語や文字言語に表すことで，児童の学習活動が活性化し，理解が深まり，教師側の実態把握や称賛も具体化するなど，言語活動の価値や，幅広い学習で貫くことの意味が分かってきた。
イ　「５つの意識」に焦点化して多教科で実践していくことで，全教育活動をとおした言語活動の意義と具体策が見えてきた。
ウ　言語活動を支える「５つの意識」が浸透してきた。言語活動ポイントカードの活用が効果的であった。
エ　情報の発信者や受信者としての心構えが良くなってきた。
オ　聞く態度が良くなってきた。
カ　実際の言語活動のシーンでは，相手意識，目的意識，方法意識等に大きな成長が感じられた。

音声言語・文字言語に表すという言語活動を通して、学習活動が活性化・理解が深まったこと、また、言語活動を行うことで、受信者としての意識形成に役立ち、学習者自身が聞くことの意味を見出したことが成果として挙げられた。本実践の言語活動は、話し合い活動が中心であり、「聞く」ことが重要な役割を果たす。少人数ながらも、協同性を担保した授業展開にするためには、学習者自身が、他の学習者の話を「聞き」、理解したうえで学習を進めなければならない。その点において、本実践は、学習者にとって意義あるものであった。

通常の30人規模の教室における言語活動では、少人数での話し合い活動から、学級全体での意見交流や発表などに展開する。その中で学習者は、数多くの意見に触れ、自身の考えを変化させたり、深化・拡充させたりする。そのような学習展開が、物理的に少人数の学級ではできないという点で異なる。しかし、そのような学級単位で行われる意見交流の要素は少人数学級における言語活動にも含まれている。

換言すれば、少人数学級で行った言語活動に、「確かめ合う」などの話し合い活動、自分の意見をもち「説明する」活動などが含まれているのである。また、少人数であることにより、「自己と他者」がそれぞれ学びあう仲間として重要な役割を果たしていることの意識が生まれることは、言語活動の展開において非常に重要な役割を果たしたと考えられる。

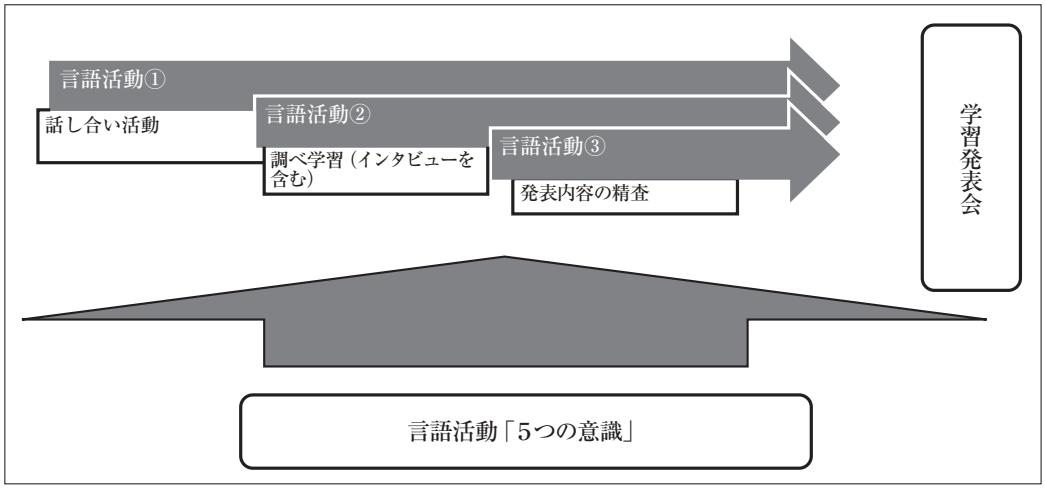
４　総合的な学習の時間における言語活動実践

次に総合的な学習の時間での言語活動実践をみていく。総合的な学習の時間では、前掲の理科での学習と異なり、３・４年生が同じ内容を活動した。

まず、単元の全活動を以下に示す。

オリエンテーション	1　オリエンテーション
課題設定	2　テーマを知り、サブテーマを決める【本時】
	3　活動記録ノートの書き方を知る（足跡ノート）
調べる	4　情報の集め方を考える。 5　インタビューの項目を考える。
	6　インタビューの練習をする。
	7　インタビューをする。（インタビュー中、他の人は観察する。） 8　ほかの人たちのインタビューの仕方を見て、感じたことを伝え合う。 これまでの活動の流れを振り返る。 （１学期最後の活動）
まとめる	（２学期最初の活動） 9　発表会までの活動内容を考える。
	10　追加取材の必要性を判断する。 11　追加取材をする。
	12　発表会で伝える際の、いろいろな伝え方を話し合う。
	13　伝えたい内容をもとに、伝え方を考える。
伝える	14～15　発表の台本を考える。
	16～19　制作活動と練習を並行して進める。
	20　リハーサルをする。 21　リハーサルの結果をもとに、修正作業をする。
	22　発表会をする。（学習発表会）
振り返る	23　活動を振り返る。

以上のような単元計画に基づいて指導を進めていく。学期をまたいで授業展開を行う。最終的には、学習発表会での発表を計画しており、児童の意欲、目的意識を持たせようとしている。さて、この計画を見てみると、言語活動が二重となっていることがわかる。つまり、日々の授業における言語活動と、それらの学習を生かしたうえで、最終的な発表会での発表という言語活動に結び付けていくというものである。図式化すると以下のようになる。



では、次に、本時の実際を見る。以下のような授業展開となっている。

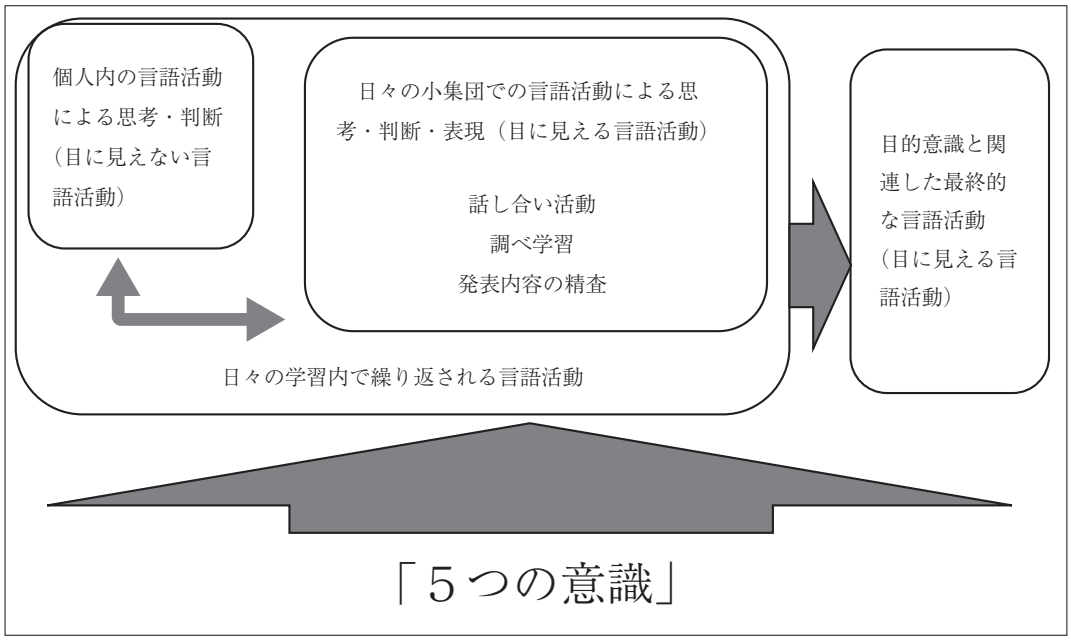
過程	主な学習活動 ★言語活動（重点）	時間	教師の具体的な働きかけ※評価
つかむ・見通す	1　本単元のテーマを知る。 2　本時のめあてを確認する。	5分	私たちの住んでいる竹島には、いいところがたくさんある。竹島について調べて、学習発表会で発表しよう。そして、竹島を支えてくれているたくさんの人々に感謝の気持ちをもって、自分たちにもできることがないか考えてみよう。 ・　言語活動ポイントパネルを使って、相手意識・目的意識（調べたことを学習発表会で伝えよう）を高める。
調べる・深める	3　ウェビング法で、調べる対象の候補を考え、紙に書く。（個人で） 予想される対象→ 竹島の産業（畜産、漁業等） 名所、文化（踊り、歴史等） 4　★候補から実現可能なものを話し合う。（小グループで） 5　各グループで話し合ったことを発表する。（グループの代表者） 6　★他のグループの発表を聞いて、感想を伝え合う。	5分 15分 10分	・　子どもたちの興味関心をもとに自由に紙に書かせ、できるだけ多くの意見を出させる。 ※　本時のめあてに沿った考えをもつことができたか。 ・　調べる方法（この方法なら調べられる）調べる時間（どれくらいの時間をかけて）の視点で話し合わせる。 ・　方法意識（この方法なら調べられる）場面・状況意識（これぐらいの時間で調べられる）の高まりを称賛し、話し合いの楽しさを味わわせる。 ※　調べる方法・調べる時間の視点で話し合うことができたか。 ・　代表者には理由をつけて発表させる。 ・　調べる方法・調べる時間の視点で相互に評価させるようにさせる。 ※　他のグループと意見交換することができたか。
振り返る・生かす	7　聞いた発表を参考にして実現可能な対象を決定する。 8　教師の助言を聞き、次時のめあてを話し合う。 9　今日の活動反省・次時の予定を確認する。	6分 4分	・　自分の興味・関心と調べやすさから、サブテーマを決めるようにさせる。 ・　後の活動がしやすいように、第２・第３候補まで考えさせる。 ※　自分が実現可能なサブテーマを決めることができたか。 ・　話し合いや発表の良かったところを認め、次時の意欲を高める。 ・　本時の感想を書かせる。

本時における言語活動は、話し合う・伝え合う活動が中心となっている。しかし、候補を考えたり、話し合う際に個人内の思考活動が行われたりしている。また、実現可能な中から、選択する場合には、判断力が必要となる。その際、「５つの意識」が判断材料となっている。さらに、発表する際には、表現力も培われる。

このように、目に見える言語活動としては、「話し合う」ことが中心となるが、その実、個人内では、思考・判断が行われている。そういった意味では、個人内の言語活動、小集団としての言語活動と二重の言語活動が展開されていることがわかる。

５　おわりに

以上、複式学級における言語活動の展開について、理科と総合的な学習の時間を見てきた。理科の学習においては、少人数ということからも協同的な学習の際には自己と他者の重要性を学習者自身が感じ取り、「聞く」ことの重要性を認識した学習が展開されていた。一方、総合的な学習の時間では、言語活動を用いた授業の展開過程において、学習者の言語活動がどのように展開されているのかが明らかになった。その構造は、以下のように図式化できる。



このように、個人内の目に見えない言語活動と小集団での目に見える言語活動との往還を繰り返すことで、最終的な言語活動が展開された。それらのすべての段階において、「５つの意識」が意識されることで、言語活動が充実することは明らかである。これらの小集団での学びにおいて、重要な位置を占めるのが、個人の思考活動であり、個人の意見である。この言語活動の授業展開は、次の学習指導要領におけるキーワードの一つである「アクティブラーニング」にもつながると考えられる。このような学びの展開を30人学級でどのように展開するかについては、今後の課題である。

参考文献

1　『豊かな言語活動が拓く国語単元学習の創造』（2010）東洋館出版
2　『新しい教育課程における言語活動の充実』（2010）学校図書
3　北海道教育大学、北海道教育委員会『複式学級における学習指導のあり方』北海道立教育研究所